

「糖尿病」から、世界の共通語である“Diabetees”へ

ダイアベティス

一緒に、糖尿病の今を考えてみませんか？

今、糖尿病医療の世界は、変わりつつあります。治療の進歩とともに、糖尿病のある人一人ひとりが、病気があっても人生を充実させるためのお手伝いをする医療を提供するという考え方が生まれています。

Q1 世界、日本において糖尿病とともに生きていく方はどれくらいでしょうか？

現在、全世界では、5億3,700万人、成人の10人に1人が糖尿病とともに生きています。特にアジア・太平洋、東南

アジアでの患者数の上昇が指摘されており、日本においても、2022年（令和4年）国民健康・栄養調査（厚生労働省）によると、「糖尿病が強く疑われる人」の割合は、男性18・1%、女性9・1%です。

Q2 糖尿病におけるステイグマとは何でしょうか？

社会における糖尿病の知識不足、誤ったイメージの拡散により、糖尿病をもつ人は「特定の属性に対して刻まれる負の烙印＝ステイグマ」（社会的偏見に

Q4 ステイグマへの対策としてどのようなことがありますか？

日本糖尿病学会と日本糖尿病協会が、糖尿病の正しい理解を促進する活動を通じて、糖尿病をもつ人が安心して社会生活を送り、人生100年時代の日本でいきいきと過ごすことができる社会形成を目指す活動（アドボカシー活動）を展開しています。また、そのような社会を実現するのは、わたしたちの糖尿病に対するほんの少しの関心でもあります。正しく知ることは、わたしたちの健康に役立ち、糖尿病のある人へのやさしい理解につながります。

糖尿病にまつわる“ことば”を見直すプロジェクトもそのひとつです。

「糖尿病」から、世界の共通語である“Diabetees”
「ダイアベティス」へ。

糖尿病に対する社会的偏見は、不正確な情報・知識に起因する誤った認識（ことば）により生じることが多く、病態を正確に表していない病名や、糖尿病医療で使われる不適切な用語（侮蔑的な表現である「糖尿」や現在の疾患概念にそぐわない「療養指導」等）の使用によるマイナスイメージの拡散により、糖尿病のある人は自らに非がないにもかかわらず、社会から負の烙印（ステイグマ）を押されます。そのため日本糖尿病協会において、ステイグマを生じうる用語の見直しと糖尿病のある人が前向きに治療に取り組む環境の整備が進められています。

※今回の原稿は日本糖尿病協会、日本糖尿病学会、World Diabetes Day（世界糖尿病デー）等の資料に基づいて作成をしました。



今月の先生 岐阜市民病院 糖尿病・内分泌内科 黒田 英嗣

〇役職

糖尿病・内分泌内科部長
栄養部長
研修センター副センター長
地域連携部副部長
研修センター後期臨床研修室長
栄養部栄養管理室長
地域連携部地域連携室長

〇主な資格、認定

日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・指導医
日本糖尿病学会専門医・研修指導医
日本内分泌学会内分泌代謝科専門医・指導医

〇卒業年、主な職歴

平成10年卒
岐阜大学医学部付属病院
岐阜県立岐阜病院
海津市医師会病院

